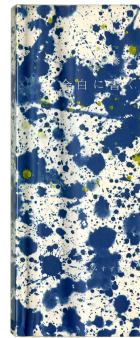


アート・アーカイヴ資料展 XVI 「影どもの住む部屋—瀧口修造の書齋」

Introduction to Archives XVI: The Shadow in a Marginalia: Shuzo Takiguchi's Room



1-1. 会期／場所

2018年1月22日(月)～3月16日(金) | 土日・祝日休館 | 入場無料 | 11:00-18:00 | 主催：慶應義塾大学
アート・センター、助成：公益財団法人 花王芸術・科学財団 | 会場：慶應義塾大学アート・スペース

1-2. 概要

これは「書齋」といべきものか。それこそ「影どもの住む部屋」といべきか。——瀧口修造「白紙の周辺」
(『余白に書く』みすず書房、1966年)

瀧口修造(1903-1979)は詩人、美術批評家であると同時に、50年代にはタケミヤ画廊を中心に展覧会のオーガナイザーとしての活動を、60年代には造形的な実験を開始し、領域を横断する活動を実践した人物である。

本展は諸資料を通して瀧口の書齋を映し出す試みである。書齋とは、制作を行う場所であり、制作プロセスの中で様々な思考や記憶が縦横無尽に飛び交う場所すなわち「影ども」の住む部屋である。

瀧口が書齋で試みていた様々な資料群の布置の改変を写真を通じて見出すとともに、『余白に書く』という書物に着目し、その初出印刷物の展示において、書物へと結晶化する事前と事後の状態の比較を行う。つまり書齋写真を書齋に住まう「影ども」の映像の群れとして見ること、そして結晶化した『余白に書く』という書物を書齋の模型のひとつとして考え、その制作プロセスへと還元して見ることで、過ぎ去った書齋での出来事と瀧口の制作それ自体について考える試みである。

1-3.出展予定資料

I. 書齋写真

- 『美術手帖』1956年2月号（瀧口修造の書齋写真掲載のもの）
[書齋で若い友人たちと]（1961年）
[書齋にて]（1963年）
羽永光利《西落合の自宅書齋の瀧口修造》（1970年）
細江英公[書齋の瀧口修造]（1970年頃）
〔岡崎和郎《瀧口修造—Arrows Finger》をはめた瀧口〕（1973年）
高梨豊[オリーブの木の下の瀧口修造]（1974年）
大辻清司《西落合の自宅書齋の瀧口夫妻》（1975年）
大辻清司《瀧口修造の書齋》（1980年）ほか

II. 『余白に書く』と初出印刷物／草稿類（印刷物には一部書込みあり。草稿類は今後の調査によって増加する可能性がある。）

『余白に書く』初出印刷物、計52点、草稿類、計6点

III. 瀧口修造書齋平面図

池田龍夫／磯崎新／巖谷國士／加納光於／中江嘉男・上野紀子

1-4.関連企画

関連トーク・イベント | （詳細はHPを参照。<http://www.art-c.keio.ac.jp/>）

2018年

1月26日 | 石岡良治-久保仁志

2月16日 | 土屋誠一-久保仁志

3月9日 | 山本浩貴（いぬのせなか座）-久保仁志-山腰亮介

企画担当：慶應義塾大学アート・センター 久保仁志、森山緑

特別協力：山腰亮介

連絡先：kubo@art-c.keio.ac.jp

03-5427-1621 | 〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45